られる．

5. in vitro, in vivo における各種放射性コロイドの RES 細胞への転入の比較

長井　一枝　　伊藤　安彦　　大塚　信昭
柳元　真一　　（川崎医大・核）

^{99m}Tc-アンチモンコロイド (Tc-ASC), ^{99m}Tc-イオウコロイド (Tc-s), ^{99m}Tc-レニウムコロイド (Tc-Re) の RES 集積を検討した．in vitro で，ラット肝星細胞と骨髄内貪食細胞への転入は両者とも Tc-ASC: 0.2%, Tc-S: 0.6%, Tc-Re: 0.04% であり，コロイドの種類による転入率の差は認められたが，細胞間に貪食率の差は認められなかった．しかし，骨髄スキャンでは，Tc-ASC, Tc-Re, Tc-S の順に骨髄集積が高く in vitro の結果と一致しなかった．また，Tc-ASC を用いて骨髄集積に及ぼす粒子数の影響をラットの生体内分布にて検討した．投与粒子数が増加すると肝と骨髄集積は若干増加するが，骨髄対肝集積比は変化しなかった．したがって，骨髄集積に及ぼす粒子数の影響は少ないと考えられた．

6. In-111-oxine 標識血小板によるシンチグラムについて

武本　本久　　（香川県立中央病院・脳外）
真鍋　泰治　　古坪　　崇
（同・RI 診）

虚血性脳血管障害例の多くは，血小板血栓によって起こるとされており，血栓発生部位を知ることは，本症の診断治療上重要なことと考えられる．そこで，私どもは，21例の本症例に，計 27 回の In-111-oxine 標識血小板シンチグラムを施行したので報告した．血小板シンチグラム上 uptake のみられた例は，10例であった．これら uptake のみられた例は，血管病変の高度な例に多く，また検査前に血流改善剤，血小板凝集阻害剤の投与を受けていない例が多く，しかも発作から検査までの期間の短い例が多かった．一方，uptake のみられない例では，病変が軽度か，検査前に血小板凝集阻害剤の投与を受けていた例，あるいは，発作からの期間が長い例が多かった．これらの結果より，In-111-oxine 標識血小板シンチグラムを行う場合，検査前の治療，検査までの期間について充分な検討を行う必要があると考えられた．

7. 頭頸部領域悪性腫瘍における ^{67}Ga シンチグラフィーの検討

森本　節夫　　平木　祥夫　　山本　博道
竹田　芳弘　　上者　郁夫　　若林　寿生
青野　　要　　（岡山大・放）
杉田　勝彦　　（同　・中放）

装置の進歩に伴い，検出率が向上しているので臨床的有用性の再評価を行った．

1979年 6 月より1982年 5 月までの 3 年間に ^{67}Ga シンチグラフィーを施行した頭頸部悪性腫瘍患者は62症例で，そのうち治療前検査48症例につき検討した．組織診断のついている病巣部の集積率につき，組織別および部位別陽性率を呈示した．全陽性率は 81% と高率であり，組織別では，悪性リンパ腫が 18/19 (95%) 扁平上皮癌 13/19 (68%) 腺癌 1/2 (50%) 未分化癌 2/3 (60%)，部位別では全領域において比較的高陽性率を呈したが，舌，喉頭，甲状腺は低陽性率であった．

8. ^{201}TlCl による負荷心筋シンチ

謝花　正信　　荻野　隆一　　松本　　勉
小谷　和彦　　勝部　吉雄　　（鳥取大・放）
佐貫　　裕　　米田　幸夫　　（松江市立病院）

狭心症を疑った24例に対して ^{201}TlCl とエルゴメーターによる負荷心筋シンチを施行した．心筋の 8 分割 ROI の count を元に，C.M.P.R. (心筋局所灌流比) を oki if 500 で算出した．その結果，従来の circumferential profilas method に比べて陽性率が高く，安静時像における low count area の検索に特に有効と思われた．また判定に熟練を要さず，computer による自動診断が可能と思われた．C.M.P.R. 値は今回 0.8 以下を有意としたが，positive の ROI の分布と全体の ROI の C.M.P.R. の分布より，ほぼ，適当な範囲にあると思われた．

Presented by Medical*Online